

こども音楽療育士の資格を持つ保育者養成の意義 — フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法を基に —

馬 場 住 子*

The Significance of Training Childcare Workers Who Are Certified Child Music Therapist

— Based on Teaching Style Proposed by Fröbel's "Die Mutter und Koselieder" —

Sumiko Baba

【キーワード】 フレーベル, 母の歌と愛撫の歌, こども音楽療育士
Fröbel, Mutter und Koselieder, Child Music Therapist

1. 研究の背景と目的

2018年4月より新しい「保育所保育指針」など三法令が施行されているが、新しい法令で謳われているのは幼児期に育て欲しい「豊かな感性・表現」など10の力に見られる小学校を見据えた専門性を持った保育・教育である。また、近年発達に障がいがある子どもが増加傾向にあることから、今後はより専門性を持った保育者養成が求められていると言えよう。そこで本研究では、保育者養成におけるこども音楽療育士¹⁾の資格に着目し、我が国の乳幼児教育の源流とも言えるフレーベルの歌や音楽を通じた教育方法を紐解くことから、これからの保育者養成に求められる保育者の専門性について、音楽を通じた保育・教育、療育の観点から、示唆を得たいと考える。

2. 先行研究から見る障がいのある子どもの増加

2012年に文部科学省が実施した調査では、全国の公立の小・中学校の通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒は6.5%とされており、これは通常学級に1~2名は常時気になる子どもがいるという実態を示している²⁾。また、櫻井(2015:53-65)は、近年気になる子どもが就学前の保育現場でも急増しており、その在籍率はすでに全国平均で10.0%を超えているとしている。そのような状況下における対応は、特別な専門機関や専門家だけに任せていられる状況ではなくなってきていると言える。2006年の障害者権利条約の国連での採択以降、我が国でもインクルージョンを求める流れが児童福祉施策でも強まり、2012年には児童発達支援センターの設置により通所系の障害児施設が統合されるなど、気になる子どもをとりまく状況は大きな変化を遂げている³⁾。

所属および連絡先
* 大阪千代田短期大学

そのような中、伏見ら（2012:93-99）も、近年の保育現場の実情として、インテグレーション保育の対象外でありながら、集団活動に馴染みにくい子どもの存在が多数報告されていることや障がいの認定を受けた子どもに対して、加配職員の費用や助言指導が保障されているケースにおいても、日常の指導は担任保育者に委ねられていることを指摘している。通常、障がいの認定を受けていない子どもを見てきた保育者にとって、集団の中で物へのこだわりや人への関心の持ち方など、発達にばらつきのある子どもや何となく違和感を感じる子どもへの対応は、保護者との関係づくりも含めて困難なケースが多い。保育者が園生活やクラスにおける集団での一斉活動を行っていく上で、保育・教育課程に沿った活動を提供するだけでは、さまざまな子どもたちがいるクラスにおいてはクラスとしてのまとまりや課題の達成がうまくできないことが推測される。言い換えれば、保育者には、自らの担当するクラスにいる発達に課題を持つ子どもたちを排除することなく、全体への指導が求められているとともに、教育・保育の現場全般においてもインテグレーション保育やインクルーシブ保育の実践も一課題となってきた現状が見受けられる。このように、保育者には、状態の異なる子どもたちが一緒に活動でき、それぞれの子どもの発達段階や課題を見極めた上で、適切なアプローチをしながら且つ集団としての円滑な活動を行うことが求められているのである⁴⁾。

そのような中で、感覚を通した音楽を用いた教育が、教育・保育の現場では、発達に課題を持つ子どもたちへの効果が高いことが実証されている。療育プログラムにおいても特に音楽活動が重要なプログラムとして位置付けられていることが多く、保育の専門性に加え、音楽を有効に活用し、療育的な支援とかわりができる保育者、実践的な理論と技術を習得したより専門性の高い保育者の養成が近年求められていると言えよう。そして、それらは発達に課題を持つ子どもたちだけではなく、子どもたち全般にも適用する専門性であると考えられる。小坂ら（2006:11）は、一般的な音楽の作用を人は音楽により、穏やかな眠りについたり、嫌なことや辛いことが癒される、モチベーションが上がる、不安が解消されるなどとしており、音楽療法の祖と言われたガストン（Everett Thayer Gaston, 1901-1970）は、音楽の特性を優しい情緒に由来したコミュニケーションであり、欲求満足の源泉であるとしている⁵⁾。また、中島（2015:163）は、スウェーデンの音楽療育現場の視察より、音楽療育においては障がい者への療育という考え方ではなく、一人の人間への音楽を通した成長・発達を支援するという考え方が根本にあるべきであることを提唱している⁶⁾。

3. 子どもの音楽療育とは

一般的に音楽療法の定義とは、音楽の持つ生理的、心理的、社会的働きを応用し、心身の障がいの軽減回復、機能の維持改善、生活の質の向上、問題となる行動の変容などの目的のために、幅広い年齢を対象とした意図的、計画的に行われる治療プロセスとされている。音楽療法は、1954年にボドルスキーの『音楽療法』が出版されたことが一契機となり、新しい治療法として注目されるようになり、タマゴマラカス、ハンドドラム、カラードラム、カバサ、カリンバ、ライヤー、フィンガーシンバル、レインスティック、ギロ、メタルフォン、ツリーチャイム、サウンドホース、スプリングドラム、スライドホイッスル、セミーヤ、バードコールなどの楽器が多く用いられている。

音楽療法における療法とは治療の方法であるが、このような音楽療法の考え方を基にし、対象を子どもとし、発達障害などがある場合に個々にふさわしい支援を行うことを目的とした教育が音楽療育であり、音楽の持つ力を通して、発達障がいなどのある子どもの生きにくさを改善し、その特性に合わせた適切な支援や教育を行うことが音楽療育の目的であると考えられる。その療育方法例としては、心地よい音楽を聴くことからストレスを軽減する、保育者と音楽を聴きながら身体を動かしたりすることからコミュニケーションを取る、リズムに合わせて簡単な楽器を演奏する、保育者と一緒に歌を歌ったりするなど、子どもたちが主体的に音楽を楽しみ、音楽を通して表現することが挙げられる。

4. 保育者養成校におけるこども音楽療育士認定資格

こども音楽療育士とは、保育および障がい児療育において、発達にあわせた音楽遊びを通して、子どもたちと心を通わせたコミュニケーションと確かな信頼関係を築くための認定資格である。資格取得方法としては、全国大学実務教育協会（JAUCB）に入会する8大学と20の短期大学において規定の科目・単位を履修し、必修科目・選択科目合わせて20単位以上を履修し、到達目標を達成することで取得可能となる⁷⁾。現在までに「こども音楽療育士」資格は2647件が認定授与されており⁸⁾、領域・到達目標の区分と履修すべき単位は以下の通りである。

表1 領域・到達目標の区分と履修すべき単位⁹⁾

領域・到達目標の区分		開発する能力	必修修得単位数	総履修単位数
領域1	こども音楽療育の基礎となる保育・教育・福祉の知識、音楽遊びに関する基礎知識及び基礎的な音楽技術がある。	<ul style="list-style-type: none"> 音楽の基本知識と音楽技術 音楽療育に必要な基礎的な知識 音楽療育に必要な音楽知識・技術の活用 	4単位以上	20単位以上
領域2	こども音楽療育の意義を理解し、専門知識・技術を修得している。	<ul style="list-style-type: none"> 音楽と発達の理解 音楽療育知識 音楽療育に必要な実践力 	3単位以上	
領域3	こども音楽療育や音楽の演習を通して、専門知識や技術を使って総合的に実践する能力を備え、スペシャリストとして、学びを継続する重要性を理解している。	<ul style="list-style-type: none"> 音楽療育の総合的実務実践力 	1単位以上	

尚一例として、本学（大阪千代田短期大学）では以下の科目（単位）取得（表2参照）が必要であり、授業内容および授業計画例（一部）は表3の通りである。

表2 協会指定科目および大阪千代田短期大学開校科目、単位数¹⁰⁾

協会指定科目		本学開校科目		単位数	総履修単位数
領域1	子ども音楽療育の基礎となる知識・音楽技術の領域	保育内容の指導法（音楽表現Ⅰ）	演習	1	計20単位必修
		保育内容の指導法（音楽表現Ⅱ）	演習	1	
		特別支援教育	演習	1	
		子どもの保健	講義	2	

		表現技術（ピアノⅠ）	演習	1
		表現技術（ピアノⅡ）	演習	1
		子ども家庭福祉	講義	2
		幼児と人間関係	演習	1
		幼児と健康	演習	1
		幼児と表現	演習	1
領域 2	子ども音楽療育の専門知識・技術の領域	こども音楽療育演習	演習	1
		こども音楽療育概論	講義	2
		こども家庭支援の心理学	講義	1
		教育心理学	講義	2
領域 3	子ども音楽療育の総合的実務実践力の領域	こども音楽療育実習	実習	1
		特別支援教育・保育演習	演習	1

表 3 こども音楽療育演習の授業内容および授業計画¹⁾

授業内容
<p>目的と概要</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な楽器を演奏し音楽療育プログラム案の中で活用できる。 手遊び、音楽身体遊び、歌唱を音楽療育プログラム案に取り入れ実践できる。 音楽療育の対象者に合わせた音楽プログラムが作成できる。 音楽療育の対象者に合わせた音楽プログラムが実践できる。
<p>到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な楽器を演奏し音楽療育プログラム案の中で活用できる。 手遊び、音楽身体遊び、歌唱を音楽療育プログラム案に取り入れ実践できる。 音楽療育の対象者に合わせた音楽プログラムが作成できる。 音楽療育の対象者に合わせた音楽プログラムが実践できる。 音楽プログラムの作成と実践において、障がいの種別での配慮する点を理解している。
授業計画
<ol style="list-style-type: none"> はじめに 音楽療育での楽器の活用法①-小物楽器を中心に 音楽療育での楽器の活用法②-音楽療法用楽器 手遊び・歌遊び・身体遊びを使用した発達援助の方法と実践 障がい種別による音楽療法の方法 発達援助をふまえた、音楽プログラムの作成 障害児施設での演習セッション① 障害児施設での演習セッション②

5. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』に描かれた歌や音楽を用いた教育方法

幼稚園の創始者であり、現在の日本の幼稚園や保育所に多大な影響を与えたフレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852）は、著書『母の歌と愛撫の歌（Mutter-und Koselieder）』において、乳幼児教育における歌や音楽を用いた教育方法を示している。『母の歌と愛撫の歌』は、7編の「母の歌と愛撫の歌」、49編の「遊戯の歌（Spiel-Lieder）」、1編の「むすびの歌（Schluss-Lied）」（扉の説明、『母の歌と愛撫の歌』への指示、子どもに見入る母への一べつ、遊戯の歌の欄外にある装飾画の説明、この本を生みだした精神）と楽譜版から成るが、ここでは、フレーベルの教育思想を基にした誕生からの乳幼児の具体的教育方法がその成長の時期を追って歌と詩と絵と遊び方の説明で示されてお

り、遊び（Spiel）歌を通した乳幼児の身体的・精神的発達を促す教育が自然に行えるようにとの意図が込められている。

フレーベルは、乳幼児期における「官能から内心の門がひらく」¹²⁾ 特質を捉え、幼ければ幼いほど感覚を通しての教育を推奨している。そして、「現代の最も真剣なもろもろの教育的欲求は、既に子どもの初期の教育においても、歌との適当な協力によってのみ、十分に達成される」¹³⁾ とし、「歌は子どものうちにある高尚なものを早くから強め、そして子どもをその高尚なものになおいっそう感じやすくする」¹⁴⁾ ものであることから、「幼児期や乳児期のための小さな遊びである身体・四肢および感覚器官の最初の諸遊戯も、その大部分が歌をともなっている」¹⁵⁾ と主張している。そのため、『母の歌と愛撫の歌』における諸遊戯はそのほとんどが歌を伴う遊戯であり、それが、何より乳幼児期には最もふさわしい教育方法であるとしているのである。加えて宮崎恵（1991）は、「日常生活の中に現れる様々な表現は、子供の内的世界の反映であり、心（精神）の活動の現れである」¹⁶⁾ とし、「感覚や予感が精神的なものそのものを非常に豊かに、象徴的に育む」¹⁷⁾ ことから、外からの刺激で心の内の生命を養い、乳幼児の感情や感覚や予感を目覚めさせる『母の歌と愛撫の歌』を表現教育の基礎となるものとして捉えている。

以下に『母の歌と愛撫の歌』より、音楽を用いた遊びの中から2例を示すこととする。

遊び歌例 1. 「ひなどりさんおいで」（“Hühnchenwinken.”）

装飾画は図1、歌詞は以下である。

Wink' den Hühnchen, dass sie nah'n, sag': Ich will euch schön empfann.

ひなどりを 呼んでごらん おいで おいでと呼んでごらん¹⁸⁾

楽曲は、G dur、2/4 拍子、M.M. ♩ = 74、形式は、A (ab)、全4小節、音域は、高音部が g^1 - g^2 、低音部は fis^1 - h^1 。

子どもに身近な鶏のひな（‘Hühnchen’）を題材に「おいで おいで」と差し招くしぐさを伴った親しみやすい歌詞の遊び歌である。この歌詞に託された想いをフレーベルは次のように述べている。「母はたしかに、子どもが彼自身の清新な、生き生きした、内的生活を外界の生活の鏡の中に真に明らかに眺め、心に力づくよく自己の内に感ずるようにとの目的をもって、彼を戸外へ連れ出した」¹⁹⁾ のである。新鮮な自然の中で子どもの表情は、健康で快活そうで、聡明さに満ち溢れており、子どもは「自然の鏡の中に彼自身の内的生活を見、またこの鏡をかように眺めることによってその生活を強めていく」²⁰⁾。そして、「小児の小児らしい遊びより、愛らしいものがあるか」²¹⁾、自然の中で遊ぶことこそが子どもを生き生きさせると語っている。初めて身近な雛との触れ合いを主題にした曲であることから、対象になる子どもが雛など身近な生き物に興味を持つ発達段階であることが分かる。



図1. 「ひなどりさんおいで」の装飾画²²⁾

遊び歌例 2. 「花かご」(“Blumenkörbchen.”)

装飾画は図 2、歌詞は以下である。

Kindchen woll'n ein Körbchen machen, d'rinn zu tragen schöne Sachen; Blümchen woll'n wir darinn' tragen, werden drob sich nicht beklagen; Wollen sie dem Vater bringen, ihm ein Liedchen dazu singen, la la la la, la la la la, Lieb Blumelein, La La La La, La La La La, sollt beim Vater sein.

さあ！ かごを作りましょう きれいなものを入れましょう 花を入れましょう 花はきっと
喜ぶでしょう 花かごを父さんに 歌いながら持って行こう ララララ ララララ かわいい花
ララララ ララララ 父さんに²³⁾

楽曲は、G dur、6/8 拍子、M.M.♩.=76、形式は A (aa') B (bb') C (cc') D (dd')、全 20 小節、音域は、高音部が g^1 - g^2 、低音部が e^1 - c^2 である。

フレーベルはこの遊びの内面的な意味を「子どもの生活および家庭の生活において、彼が多方面の、眼には見えぬが感じ得られる内的精神的結合—特に、人間相互の結合をねんごろに注目し、慎重に保護するように、早くから彼を導くこと」²⁴⁾にあるとしている。それらを育むためにふさわしい歌詞であり、a'は a の反復、同様に b'は b の、c'は c の、d'は d の反復である。反復が多いことから、子どもには歌いやすく真似やすい楽曲であると言える。また、8分の6拍子であるが、♩. を1拍にとることから、手遊びをしながら歌いやすい速度と拍子でもある。一部に転調は見られるが、和声的にも I、V を中心とした単純な曲であり、フレーベルは「子どもの心を動かすものを 形づくることを試みよ。子どもの愛も、心から養われぬと また老い得るものだから」²⁵⁾と記し、保育への心構えを説いている。ここでは父親の誕生日に花をプレゼントした幼い子どもに、父は、みんなで一緒に神に感謝を捧げようと話している。



図 2. 「花かご」の装飾画²⁶⁾

6. 考 察

フレーベルは、乳幼児期の教育としては感覚を通じた教育方法が最もふさわしいとし、『母の歌と愛撫の歌』の遊び歌例に見られるように、子どもの生活に即した題材を子どもの身近な保育者（保護者を含む）が愛情込めて、歌などを伴って遊びを通して行うことを推奨している。『母の歌と愛撫の歌』楽譜版では、ピアノに合わせた歌唱を伴う手遊びや歌遊びが楽譜とともに記載されているが、このような遊び歌は幼稚園や保育所などにおける教育方法として現代も受け継がれている教育方法であると言える。

遊び歌例 1. 「ひなどりさんおいで」を音楽療育的視点より捉えると、まずは個々の状態により療育上必要な場合は、指を折り曲げる動作を伴うことから、四肢の訓練としての効果が挙げられる。次には、子どもの身近な生き物が題材であることから、生き物とのかかわり方を示したり、簡単な曲であること

から歌を模倣する、歌に合わせて身体を揺らすなどが療育的効果として考えられる。そして、子ども自らが音楽の持つ力に刺激を受け、発達障がいなどのある子どもそれぞれの特性に合わせた保育者や周りの人々とのコミュニケーションツールになると考えられる。

また、遊び歌例2.「花かご」を音楽療育的視点より捉えると、まずは個々の状態により療育上必要な場合は、右手の小指は左手の人差し指へ、右手の指の先は左手の親指と人差し指の間の角へ置き、両手の掌の内側が一つの半球形の凹みを形作り、両方の親指の先が外側へ向きながら触れ合うという動作をすることから、手指の訓練としての効果が挙げられる。次には、子どもの身近な花が題材であることから、植物アレルギーなどが無い場合は、実際の花の色や形を見たり、においを嗅いだり、実際に花かごに花を入れる体験の機会づくりになると考えられる。また、「ララララ……」という歌詞は子どもが覚えやすく、音程も模倣しやすいと思われるため、歌詞を歌ったり、歌に合わせて体を揺らしたりすることを楽しみ、歌を通して子どもが自分自身の感情を表現するなどが療育的効果として考えられる。

このように音楽療育的観点からフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』に描かれた遊び歌を捉えてみると、フレーベルの遊び歌が音楽療育の教材としても非常に有効であるということに気づかされる。また、先行研究において子どもの音楽療育とは、障がい児への療育というだけではなく、一人の人間として子どもへの音楽を通した成長・発達を支援する教育であるという考え方が根本にあるべきであると示されているように、障がいの有無にかかわらず、一人一人の子どもの発達を音楽を通して支援するという考え方はフレーベルの教育思想に通ずるものと考えられる。

近年発達に課題のある子どもが増加しており、保育者養成においては発達に課題がある子どもをどのように教育・保育していくのか、どのような力を身に付けて現場に出ることが望ましいかということが課題となっている。養成校を卒業後、幼稚園教諭、保育士資格を取得した学生は、保育や教育の現場においてさまざまな子どもたちと出会い、さまざまな保護者と出会う。そして、日々発達に課題のある子どもたちを含めてどのようにクラスを運営し、どのような教育課程を編成し、それぞれのねらいを達成していくのかという場面に直面する。そのような場面において、保育の専門性に加え、音楽を通した療育的かわりが自然にできる力が身に付いていれば、少しでもさまざまな課題を乗り越える力になるのではなかろうか。例えば、こども音楽療育士の資格を取得する過程では、子どもを対象とした音楽療育概論を理解し、音楽療育の演習、音楽療育の実習を経験するが、それらの学修は前述した力をつけるためには欠かせない学びであると考えられる。

また、現在、保育・教育施設は地域の子育て支援の役割も担っており、特に保育所では現代の子育ての課題である少子化、地域や家庭の教育力の低下、都市化による母子の孤立などへの対応も求められている。具体的には、近くに同年齢の遊び友だちがいない、異年齢など多様な集団を形成しての遊び体験ができない、地域の人々と触れ合う機会が少ない、豊かな自然の中で遊ぶ環境がない、親自身に今まで乳幼児に接したり、子育て経験のある身近な人のかかわりが少ない、身近に子育てについて相談できる人がいないなどの問題を抱える保護者の子育て支援も保育者の役割として求められる。そのような子育て支援の現場においても、音楽を用いた保育内容は受け入れられやすく、低年齢児から幅広い年齢において、少人数から多人数の子どもたちを対象とすることが可能である。また、保護者にも子どもと一緒に歌や音楽を通した遊びを体験してもらうことから、その心地よさや楽しさを味わってもらうととも

に乳幼児とのかかわり方を体得してもらうこともできると考えられる。

このように、音楽療育は、さまざまな現場で、例えば障がいのある子どもだけでなく、心に傷のある子どもや病気の子どもの、自己表現が苦手な子ども、ストレスを抱えている子ども、コミュニケーションが取りにくい子どもなどに働きかける一手段として有効であると考えられる。音楽を通してのかかわりを通して、子どもが歌や音や楽器に興味を持てたり、それらに触れることで心が明るくなったり、音やリズムを楽しむことができたり、音楽を通してコミュニケーションが取れたり、音楽の力で触れ合えたり、音楽を聴くことから心身が安定したりといった効果が期待できると考えられるからである。

そして、フレーベルの言うように視覚・嗅覚・聴覚・味覚・触覚など感覚への刺激は、乳幼児期にはもっともふさわしい教育手段であり、フレーベルの音楽を用いた具体的教育方法からも分かるように、音楽を聴く、音楽に合わせて身体を動かす、楽器を鳴らす、歌や手遊びをまねるなどの遊びは子どもの発達を促すとともに、その内面にも深く働きかけるなど、音や楽曲を用いることから、乳幼児の情操をも育んでいくと考えられるのである。

7. 結 論

フレーベルは、乳幼児期の教育としては感覚を通じた教育方法が最もふさわしいとし、歌や楽器などを伴った遊びを通して教育することを推奨している。そして、『母の歌と愛撫の歌』の遊び歌を音楽療育的観点から捉えると、手遊びを伴う点は四肢の発達を促すことに繋がり、子どもの身近な保育者が歌って聞かせる、一緒に遊ぶという点は乳幼児との触れ合い遊びとしてその五感を刺激し、子どもとの音楽を介したコミュニケーションという点からも、音楽療育の教材として適していると考えられる。そして、これらの教育方法は障がい児への療育というだけではなく、障がいの有無にかかわらず、一人一人の人間としての子どもへの音楽を通じた成長・発達を支援するという考え方が根本にあるべきであろう。

近年発達に課題のある子どもが増加しており、保育者養成においては発達に課題がある子どもをどのように教育・保育していくのか、どのような力を身に付けて現場に出ることが望ましいのかが課題となっている。保育者養成においては、保育の専門性に加え、音楽を通じた療育的かかわりが自然にできる力の養成が望まれ、それらを養成するためには、こども音楽療育士の資格取得の過程における音楽療育概論、音楽療育演習、音楽療育実習などの学びが欠かせない。また、現代では子育て支援の現場においても、音楽を用いた教育方法は、保護者支援の観点からも、保護者にも歌や音楽を通じた遊びを体験してもらい、その心地よさや楽しさを味わってもらい、乳幼児とのかかわり方を体得してもらうこともできるということから、望ましい教育方法であると考えられる。

このように、音楽療育は、さまざまな現場で、例えば障がいのある子どもだけでなく、心に傷のある子どもや病気の子どもの、自己表現が苦手な子ども、コミュニケーションが取りにくい子どもなどに働きかける一手段として有効であると考えられる。これらのことから、音楽療育士の資格を持つ保育者の養成は現代の保育の現状にふさわしく、現代の保育の課題を解決する力の獲得ということからも今後の保育者養成において非常に意義あるものと考えられた。

<注>

- 1) 一般財団法人 全国大学実務教育協会が認定する資格。(www.jaucb.jp 2021.4.1.アクセス)
- 2) 2012年に文部科学省が実施した調査については以下の通りである。実施主体は文部科学省が協力者会議を設け実施方法などについて検討し、実施。調査期間は2012年2月から3月にかけて実施。調査対象は全国(岩手、宮城、福島の3県を除く)の公立の小・中学校の通常の学級に在籍する児童生徒を母集団とする。標本児童生徒数は53,882人(小学校:35,892人、中学校:17,990人)である。発達障害について:文部科学省(mext.go.jp 2021.5.5.アクセス)
- 3) 櫻井慶一「保育所での『気になる子』の現状と『子ども・子育て支援新制度』の課題—近年における障害児政策の動向と関連して—」生活科学研究 37 文教大学 2015 pp.53-65.参照
- 4) 伏見強 伊藤美恵 富田英子 「保育における音楽療育を考える—こども音楽療育士資格認定カリキュラム導入に当たって—」京都文教短期大学研究紀要 51 京都文教短期大学 2012 pp93-99.参照
- 5) 小坂哲也・立石宏昭(2006)『実践のすすめ 音楽療法のすすめ 実践現場からのヒント』ミネルヴァ書房 pp.11.参照
- 6) 中島龍一(2015)「音楽療育研究—スウェーデンにおける音楽療育調査を基に—」兵庫大学論集(20)兵庫大学 p.163. 参照
- 7) 本論文におけるこども音楽療育士とは、一般財団法人 全国大学実務教育協会が認定する資格を指す。(www.jaucb.jp 2021.4.1.アクセス)
- 8) 一般在団法人 全国大学実務協会による2020年度の認定数は412件、2013年度よりの累計数は2647件である。尚、本資格は大学においてのみ取得可能である。(一般在団法人 全国大学実務協会へ電話にて確認 2021.8.23.)
- 9) こども音楽療育士 一般財団法人 全国大学実務教育協会 公式サイト(jaucb.gr.jp、2021.4.1.アクセス)
- 10) 2021 OSAKA CHIYODA JUNIOR COLLEGE 学生便覧 大阪千代田短期大学 2021 p.77.
- 11) 2021 OSAKA CHIYODA JUNIOR COLLEGE 講義要綱 大阪千代田短期大学 2021 p.87.
- 12) プリュウフェル編及跋 茅野蕭々譯『フレョエベル 母の歌と愛撫の歌』岩波書店 1934 p.20.
- 13) フレーベル「フレーベル自身の叙述による時代の努力と要求とに関連するフリードリヒ・フレーベルの教育の根本原理、教育の手段と方法ならびに教育の目的と目標」小原國芳 莊司雅子監修『フレーベル全集』第4巻(第16章)所収 玉川大学出版部 1981 p.507.
- 14) 同上書、p.507.
- 15) 同上書、p.507.
- 16) 宮崎恵(1991)「フレーベル「母の歌と愛撫の歌」における表現教育への一考察」駒沢女子短期大学研究紀要 第24号 p.18.
- 17) 同上書、p.18.
- 18) 歌詞および楽譜は、熊谷周子編著『フリードリッヒ・フレーベル著 母の歌と愛撫の歌 フリードリッヒ・ウンゲル絵 ロバート・コール作曲』ドレミ楽譜出版 1991 p.34.に記載。
- 19) 児玉衣子『フレーベル近代乳幼児教育・保育学の研究 フリードリッヒ・フレーベル著『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討から』現代図書 2009 p.81.
- 20) 同上書、p.81.
- 21) 同上書、p.80.
- 22) 熊谷周子前掲書、p.35.
- 23) 同上書、p.48.

- 24) 児玉衣子前掲書、p.111.
- 25) 同上書、p.110.
- 26) 熊谷周子前掲書、p.49.

<参考・引用文献>

- 馬場住子（2014）「フレール『母の歌と愛撫の歌』楽譜版の分析及び考察—乳幼児教育教材としての今日的意義を求めて—」大阪総合保育大学大学院 児童保育研究科 2014 年度博士学位請求論文
- 馬場住子 矢野正（2020）「支援が必要と考えられる保護者に対する保育者の取り組み（5）—園の種別によるアンケート結果の比較—」『日本乳幼児教育学会第 30 回大会発表抄録』 日本乳幼児教育学会 WEB オンライン開催（jseyc2020.org、2020.11.14.アクセス）
- 伊藤美恵（2020）『【教育研究活動報告】『こども音楽療育士』養成 7 年の取り組みの報告—必修科目の内容について—』『京都文教短期大学研究紀要』 京都文教大学 pp.87-93.
- こども音楽療育士 一般財団法人 全国大学実務教育協会 公式サイト（jaucb.gr.jp、2021.4.1.アクセス）
- 子どもを対象とした音楽療法について 日本メディカル心理セラピー協会（domap.net、2021.4.1.アクセス）
- 小坂哲也・立石宏昭（2006）『実践のすすめ 音楽療法のすすめ 実践現場からのヒント』ミネルヴァ書房
- 熊谷周子編著（1991）『フリードリッヒ・フレール著 母の歌と愛撫の歌 フリードリッヒ・ウンゲル絵 ロバート・コール作曲』 ドレミ楽譜出版
- 中島龍一（2015）「音楽療育研究—スウェーデンにおける音楽療育調査を基に—」『兵庫大学論集（20）』 兵庫大
学
- 小原國芳・荘司雅子（1981）『フレール全集 第4巻 幼稚園教育学』 玉川大学出版部
- プリュウフェル編及跋（1934）茅野蕭々譯『フレョエベル 母の歌と愛撫の歌』 岩波書店
- 櫻井慶一（2015）「保育所での『気になる子』の現状と『子ども・子育て支援新制度』の課題—近年における障害児政策の動向と関連して—」『生活科学研究 37』 文教大学
- 渡辺俊太郎 馬場住子 楠本洋子（2019）「支援が必要と考えられる保護者に対する保育者の取り組み—アンケート調査における成功事例、困難要因、今後必要な取り組み—」『大阪総合保育大学紀要 13』 大阪総合保育大学 pp.25-36.